JICA Volunteer Story

［青年海外協力隊］

# 本郷 良和

HONGO Yoshikazu

# 「エコツーリズムで地域を元気にしたい」

**ベネズエラの首都カラカスから飛行機で1時間のマルガリータ島。人口約250人の小さな漁村で活動する本郷良和さんは、地域を活性化する産業を生み出すべく奮闘している。**

## 過疎化が進む漁村に唯一の日本人

南米ベネズエラの北部、カリブ海に浮かぶマルガリータ島西部のエル・オルコンは、人口約250人の小さな町。かつては漁業で栄えていたが、近年はその担い手不足が深刻だ。

若者が次々と島から都市に出ていく中で、青年海外協力隊員としてこの地に赴任した本郷さんは町で唯一の日本人。「小学生の時、ソマリアの内戦から逃れマグカップも持てないほどやせ細った子どもを見て、心が突き動かされました」。大学時代にはインドでボランティア活動をし、本当に役立つ協力の在り方を探したいと、大学院を休学して協力隊参加の道を選んだ。

**PROFILE**

1985年神奈川県出身。2013年5月から大学院（国際開発専攻）を休学し、青年海外協力隊（コミュニティー開発）としてベネズエラで活動中。

地元の学校で調査活動をする本郷さん。とにかく直接現場に足を運ぶことを心がけている

本郷さんが配属されたのは、絶滅危惧種の保護や環境教育、植林などの活動を行う地元NGO。季節や天候に収入が左右されやすい漁業に代わる産業を生み出そうと、観光客を意識した商品の開発や豊かな自然を生かしたエコツーリズムを計画していたが、具体的に進まないまま4年が経っていた。

うまくいかない理由はどこにあるのか―。本郷さんは、まず住民一人一人に話を聞くことにした。より多くの人と接して考え方を知り、活動を軌道に乗せる可能性を探ろうと、地元の学校で日本文化紹介の授業も買って出た。

そんな約半年間の調査を経て見えてきたのは、NGOと地元住民との間にある〝溝〟だった。「せっかくチャンスをつくろうとしたのに、何もしなかった」と住民への不満を漏らすNGOのスタッフたち。一方、活動に参加する予定だった住民は「私たちの生活状況を知ろうともしない」と反論していた。

「互いに歩み寄る余裕がない。でもこの関係を変えなければ先に進まない」。悩んだ本郷さんは、住民がエコツーリズムよりも家事や育児などを優先せざるを得なかった理由、NGOスタッフが住民訪問できないほど多忙を極めていたことなど、それぞれの事情を説明して、双方が分かり合えるよう仲介役に徹した。

## できる時にできることをする「一家一品運動」

まずは何か行動を起こしてほしい。そこで本郷さんが提案したのが、「一家一品運動」だった。地元ならではの商品を開発して地域を活性化しようと、大分県発祥の「一村一品運動」からアイデアを得たもの。しかし、地域の人が集まって何かを成し遂げる習慣のないこの町では、「一村一品」は難しい。そう気付いた本郷さんは、まず家族単位で「できることから始めよう」と呼び掛けた。

最初は「そんなことをやっても意味がない」とやる気を示さなかった住民たち。しかし本郷さんは、彼らがこの活動に意義を感じてくれるまで、辛抱強く待ち続けた。そんな彼の姿を見て、「そんなに言うなら、庭のトウガラシでチリソースを作ってみようか」「布を織ってみたけどどう？」と、身の周りにあるもので特産品作りに乗り出すように。「子どもが大人になった時、職業の選択肢は多いほうがいい」と、漁業の町の強みを生かした魚料理を開発し、観光客向けのレストランを始める人まで出てきた。

そんな変化を目の当たりにしたNGOのスタッフは、この町の人たちの底力を実感。「彼らの生の声を聞きたい」と、本郷さんと一緒に1軒1軒訪ねて回り、それぞれの家庭ができる商品開発について話し合いを始めた。「最初のころは、住民やスタッフから『日本から来て一体何をしてくれるのか』と言われ、焦った時期もありました」と本郷さん。住民やNGOのスタッフのもとへ何度も足を運び、地道に人間関係を構築してきた結果、少しずつ手ごたえを感じられるようになったという。8月には、それぞれの家庭が作った試作品のお披露目の場としてマルガリータ島初の日本文化祭を開き、約1000人が集まり好評だった。

来年には、いよいよエコツーリズムを始動させる予定。住民たちを集めてセミナーを実施し、共に計画づくりを進めているところだ。山間部で豊かな自然に触れるピクニックや、町の人たちが地元ならではの料理をふるまうプログラムなど、次々とアイデアが出てきて「うれしい悲鳴」だ。この町の人たちが本当の豊かさを得ることができる日を、本郷さんは思い描いている。

a.日本文化祭を一緒に企画した現地の友人、ヴィクトールさんと
b.エコツーリズムのセミナーで、日本の一村一品の取り組みなどについて説明する本郷さん
c.本郷さんが企画した研修で学んだことを生かして、コンポストで堆肥をつくる住民
d.JICAのプログラムを通じて、日本から届いた野球道具などを子どもたちに贈った